

如来のみおしえに会う

和田一丸

あるご法事でお斎をいただいている時、ご主人がこんなことを言われました。

「ご住職、今日はありがとうございます。これで肩の荷を下ろすことができました。」

「どういう荷が下ろせたのですか？」と問うと、にこにこしながら答えられました。

「まず、大勢の人がお参りくださり、にぎやか好きだった父を怒らせずにすみました。さもなかったら…。そして、親戚や隣近所に顔向けができるのでありがたいです。人並みに付き合いができましたので…。」と。

場所がお斎の席だったので遠慮をし、「そうですか」とだけ言って話を終えましたが、法事がこんなふう解釈されているのかと思わされました。どうも、父を怒らせて自分に都合の悪いことが起きると困るから。また、法事を勤めて親戚や隣人を招待しないと自分の面目がつぶれて困るから。いずれも自分が満足感を得たり、世間体を整えたりすることが主のようで、言えば、法事を自分の欲求を満たす場に体裁よくすり替えているのです。

法事で表白を読みますが、そこには『有縁のひとびと相寄り集い、亡き人を偲びつつ、如来のみおしえに遇いたてまつる』と記されています。日常は生活に追われてばかりの私たちです。せめて法事をご縁に、亡き人を偲びつつ如来のみおしえに遇わせていただくのです。私が如来のみおしえに遇わせていただくことがあって、はじめて法事といえるのではないのでしょうか。私が如来のみおしえに会うことを一番願っているのが、きっと亡き人なのでしょう。